

土づくりにかけた人びと

埼玉県
埼玉産直センター

農村地域をよささえる微生物農法

1 若者たちが夢をもって農業に

若い農業後継者はゼロになる?

農業の担い手が高齢化して、重労働がままならず、農作業に支障をきたしてきている。若い農業後継者が不足して、農業の将来が思いやられる。農村そのものに高齢者ばかりが増加して、日々の暮らしにも問題が起きている……。

もう何年もまえから、マスクミをつうじて聞こえてくる農村の状況は、展望のないものばかりになっている。すでに五年まえの新聞に、こんな記事が掲載されて全国の農民に衝撃をあたえた。

「この一年に中学から大学までの新卒者五六三万三〇〇〇人のうち、主な仕事として農業

に従事したのは、たた二一〇〇人。日立製作所一社が採用した三七〇〇人にも及ばない」

新卒の農業従事者はその後も急速に数をへらし、いまでは一六〇〇人台とも一五〇〇人台ともいわれている。この傾向は、どこまでいってもストップすることができないのだろうか。やがてこの国の若い農業従事者は、ゼロになる日がくるのだろうか。

平均三〇歳台のセンター発見

東京都に隣接する埼玉県の、北部に位置する深谷市。昭和三〇年代、自民党の大臣が国鉄に圧力かけて特急の停車駅にした。「こんな田舎の小駅になぜ特急が止まるのか」ということとで有名になった深谷も、いまでは都心まで一時間あまりで通勤できる大都市圏になっている。市街地としての開発が進む一方で、駅前の繁華街をぬけると、いまだに昔ながらの田舎の風景がひろがる。

深谷市農協の粗生産高一八〇億円のうち、一一八億円が野菜部門で占められるという。東京圏に農作物を供給する、有力な都市近郊畑作地帯になっている。

この深谷市を中心にして、付近の專業農家約二五〇戸の組合員で構成される、埼玉産直センターが活動している。農業が主要産業になっている地域でも、例外なく後継者の農業離れが進行しているいま、埼玉産直センター組合員の平均年齢は三八歳ぐらい。三〇歳そこそこの青年たちが、專業農家として生き生きと農業に力を注いでいる。このセンターには、なぜ

若者たちが集まるのか。彼らはどこに、農業の展望を見いだしているのだろうか。

秋池由裕さんは三二歳。高校を卒業してすぐに、家の農業を手伝っていた。二年ほどたつて、専務理事の山口功さんにさそわれて産直センターの組合員になった。当時はまだ産直センターの歴史も浅く、規模も大きくはなかった。「大丈夫だろうか」という思いもあったが、やれるだけやってみようと考えて参加したという。

「それまで市場に出荷する親のやり方をみて、なんかおかしいって感じていたんですよ。つくる人、買う人の関係はなくて、流通の間にたつ仲買人なんかに左右されているでしょ。」産直センターに出荷するようになって、やった分だけのことが返ってくる、自分たちでやっているんだという張り合いがでてきた。

「たとえば、一昨年みたいに天候が悪くていい作物ができないときでも、今年はこういう状態でこんな品物しかできなかったんですけど、了解して下さいていえば聞いてもらえるでしょ。こっちの要望を話すこともできるし。不作でも努力をしているわけだから、認めてもらいたい部分はあるわけです。市場だとかにかく扱いやすかったり、流通の人のやりやすいうちにさせられちゃうんですよ。」

「産直で計画がたつし自分のペースでやれる」

不作でみんながよい作物をつくれないうちに、自分だけが市場で評価されるものを生産す

ることができれば、それは大きなもうけにつながる。どれだけたくさんの農民たちが、そんな一攫千金の夢に踊らされてきたことだろうか。父親と話し合って、納得してはいったセンターの産直システムだったが、長年にわたって市場出荷でのかせぎを夢見てきた祖父には、五年ぐらいは理解されなかったという。

「産直だと、豊作のときも不作のときも価格が安定しているんですよ。じいさんなんかは、まず目先の値段でしょ。市場の値段がよくなってるのに、なんでセンターに出荷するんだって、ずっと文句いわれましたよ。でもそれは、いいときだけみたり、いい話だけをきいてきたりするから。実際は、そんなことで百姓がもうけるなんて何十年にいったべんもないことなんです」

いま秋池さんは二ヘクタールほどの露地の畑で、ネギ、ゴボウ、ホウレンソウ、カブなどを栽培する。産直センターにはいる以前は、秋池さんも化学肥料に頼りきった農業をしていた。そのほうが、労力的には楽だったのだ。だが、できる作物の品質は悪いものだった。いまでは畑を輪作体系にして、連作にならないような工夫をして野菜を生産している。輪作の期間をつめていくと収穫も落ちるし、いい作物ができない。だれでもそういうことはわかっているが、将来に展望がない状態では、苦勞してまで努力しようとはしないのだという。

「やっぱり農業はきついし、休みも一定してないでしょ。他の仕事にかわろうかって思ったこともあったけど、センターで産直やっていると、計画もたつし、自分で考えて自分のペー

スでやれるから農業のほうがいいなって思うようになって。産直やって、農業のよさがよくわかった感じなんですよ」

2 農業をゆがめてきた流通

見てくればかりの市場

深谷で代々農業をつづけている農家に生まれた吉岡進一さんにとって、自分が農業を継ぐかどうかを考えたときに、いちばん影響を受けたのは近所で農業に取り組む産直センターの組合員である先輩の姿だった。

「自分も始めは五年ほど市場出荷してたんだけど、センターの人みてっと値段おわなくていいし、落ちついてんだよね。ここのほうが安定収入があるし、計画生産ができるかもしれないって、そのあとセンターにはいったの」

農業を始めたばかりの一九歳のとき、市場の野菜価格が暴落したときがあった。ちようどハウレンソウをつくっていた吉岡さんは、収穫時期になったものを四〇〇把とり、トラックに積んで市場にもっていった。価格が安いことはわかっていたが、それ以上畑においておけば成長しすぎて売れなくなる。

「それでも苦勞して一日かけて収穫したのに、市場でついた値段はいくらだったと思いま

すか。五〇〇円ですよ。四〇〇把全部でね。びっくりして仲買さんに「これじゃ煙草三箱しか買えないよ」っていったら、「こんな日にもってくるのが悪いんだ」って、相手にしてもらえませんでした」

この進一さんと親戚で同年代の吉岡重明さんは、外見ばかりを優先する市場の不合理さに嫌気がさして、センターで産直をやるようになったと語る。

「センターなら泥つきネギでもいいっていうのに、市場は厳選、厳選でしょ。それも食べるときの中身でなく、見てくればかりを問題にするから、やっててばかばかしくなるんだよね」

吉岡さんたちの地元である深谷は、甘味があって鍋物などに最適の「深谷ネギ」の産地として有名だ。ところがこのネギを出荷するときも、下から三枚だけ葉が残っているようにしないと、Aクラスとしては買ってもらえない。

「葉っぱが三枚ついてるのが、いちばん見栄えがいいっていうことなんだね。そうでないと、Bクラスになっちゃう。でもそのためにみんな、収穫してから葉っぱをとるような、よけいな労力つかわなければならぬ」

いまではそのうえに、五キロいりの箱にAクラス品を三本ずつに束ねて、きっちり四五本つめるように要求される。三本の束は、スーパーで販売するのにちょうど手ごろな本数だからというのが理由だ。

本来の「農業」とはちがうところで、不必要な作業を強要される市場出荷。何年かに一度あるかないかの暴騰でかせぐことを期待しているうちに、農民たちはどんどん、農業の本質から遠く離れたところへつれていかれてしまったのではないだろうか。

堆肥を入れて昔の土に

吉岡進一さんは畑を親から継いだとき、土がかたくなってよい作物がつかれないように感じた。ワラや麦ワラを買ってきて畑にいれていたが、それだけでは地力を維持できなかった。産直センターにはいって、供給される堆肥を何年か使っているうちに、ようやく畑の土が昔のように弾力のあるものにもどってきた。

「おやじだって、堆肥いれなけりやいけないうてのは、わかつてたんだよね。けど、それができない、忙しくってそこまで手がまわらなくなっちゃうっていうのが市場出荷なんだよね」

年をおって厳しくなる、作物の見かけや出荷状態の規格。本来の「食料」としての生産物とは関係のない、流通にとって都合のいい等級の決め方。まれに高値で売れることがあっても、ほとんどは食べていくのがやっとという生産者価格。将来を考えて生産に力をいれていこうと思っても、余分なところで時間をとられてしまう。そんな市場よりは、安定した収入のある産直センターのほうがはるかにいい。若い生産者たちは口をそろえて語る。

農業後継者たちが、展望をもって農業に取り組み埼玉産直センター。実はこのセンターの歴史そのものが、代表理事である渋沢武三さんや山口功事務局長たちの、近代農法や市場システムの矛盾とのたたかひの歴史だったのだ。

3 試行錯誤のなかから微生物農法に

「血洗島ハウス研究会」

一九六一年に農業基本法が制定され、基盤整備や構造改善事業が全国でおこなわれていく。深谷の地域でも農業の生産性が高められていく一方で、台風や夏場の雹害など、生産者の意欲をくじく自然災害が、どうしても避けられないものとしてつきまわっていた。

六〇年代のなかには、二年にわたって猛烈な雹害が埼玉県北部を襲った。わずか三〇分ほどのあいだに、田植えがすんで間もない稲の苗までふくめて青いものがすべて全滅してしまうほどの被害がでた。

「こんなに簡単に天候に左右される農業を、いつまでもやっていいのか。これでは若い者が、あとを継がないぞ」

どこかに、天災にうちかつ新しい農業はないか。渋沢武三さんたちは仲間と研究をつづけ、当時ではまだ全国的にも珍しかった、鉄骨製のハウスによる施設園芸と出会う。冬場に晴天

となつて空つ風の吹く深谷一帯は、日照時間が全国でもいちばん長い地方。ハウス栽培には、最適の条件がそろつていた。

始めてみると生産は好調で、予想以上の収入が安定して得られるようになった。渋沢さんたちは一〇人で「血洗島ハウス研究会」をつくり、四五〇〇坪のハウス経営を開始した。「血洗島」というのは渋沢さんたちの地域名で、古戦場となつた歴史からつけられたものだといふ。露地の多品目生産から、ハウスによる少品目集中生産へ。自然災害からの渋沢さんたちの転換は、大成功したかにみえた。

好調だつた生産が壁にぶつかるのは、ほんの数年たつたころだつた。ハウスでつくる作物に原因不明の病気がでて収穫は激減し、周囲の農民からは「血洗島ハウス病」と呼ばれてこわがられた。全国の専門家に相談して調べてみると、原因は土が弱り、窒素過剰になつた状態からでた細菌性の病気とわかつた。わずかな面積で毎年きまつたものを生産する連作障害が、早くも出始めていたのだ。

それまで、渋沢さんたちの受け継いできた農業は、昔からの土づくりを大切にす農業だつた。連作すればよくないことも、知つていたはずだつた。

「ところが、六一年の農業基本法は、新しい農業の形態や農法の技術なんかを掲げて、農業改良普及所をつうじて指導してきたでしょ。従来の手間のかかる農業から、効率のいい企業的な農業経営へ切り換えろ、化学合成物によつて生産性をあげろつて。我々も、それを鵜

のみにしてしまつたわけなんですよ」

次々と病気がでてきたために、渋沢さんもハウス内で殺虫剤を使用していた。あるとき、仕事のあとに体中に発疹がでたので近所の医者にかげこんだ。渋沢さんの持参した農薬のビンをみて、医者はこういつた。

「これは第二次世界大戦のとき、ドイツ軍が開発した毒ガスの原料ですよ。こんなものを使っていたら、いのちにかかわりますよ」

土づくりの大切が基本へ

いくつかの経験を重ねて、ようやく渋沢さんたちも、土を大切にしてきたいままでの農業を忘れ、近代農法と呼ばれる合理的な農業のみに目を奪われた過ちに気づいていった。研究会で土づくりの堆肥をつくって、畑にいれていく作業を繰り返した。何年もたたないうちに、その効果はてきめんに現われた。連作障害による病気はなくなり、作物の状態も格段によくなった。今度は「原因不明の病気の発生地」としてでなく、土づくりによって成功している組織として新聞にとりあげられるようになった。

現在の埼玉産直センターでは、独自の堆肥工場や有機発酵施設をもつて、堆肥や有機肥料組合員に供給している。三〇年の経験をへて、土づくりの大切さが農法の基本にすえられている。

九四年の夏は前年の冷害とはうってかわって、日照りと水不足に全国の農民が頭を悩ませた年だった。埼玉産直センターの農民たちも、夏場の農作業には苦勞をした。

「しかし、日照りに不作なし」っていつてね。まえの年みたいな長雨はたいへんだけど、日照りのときは土さえしつかりとしていたら、それほど問題ないんですよ」

専務理事の山口功さんは、その理由をこう説明してくれた。

太陽の供給するエネルギーを「動力」だとすれば、植物の葉っぱは「工場」で、根はそこで働き生産をつかさどる「労働者」だと考えることができる。動力である太陽がなければ、いかにいい工場があっても生産はうまくいかない。また、工場を動かすには労働者、つまり根がしっかりとしていなければだめなもの。日照りで水不足のときには、植物も生きのびようとしてぐいぐい地中に根を張っていく。だから地上部分はぐったりしているようにみえても、植物自体の生命力は案外失われていない。

ところで、エネルギーを供給する太陽がどれほど植物に恵みをあたえてくれるかは、自然の作用にまかせるしかない。日照不足だからといって、雲を動かして太陽をだしたり、人工太陽で日照を補うような技術はいまのところ開発されていない。ということは、農作物を育てるときに人間ができるのは、いまのところ、植物が根をしっかりとされるような土をつくらなければならない。

吉岡進一さんは親から農業を継いだとき、畑の土がかたくなっているように感じたといっ

た。それは土に養分がなくなり、粉状になってしまったことを物語っている。土が粉状になってしまふと、水を含めば粘土のようになって、空気も水分も通さない「かたい」状態になってしまう。このような土では根がのびていく隙間もないし、酸素や水が供給されにくくなるので植物が育つことはできない。

植物が生き生きとなれるよい土とは、「団粒構造」というごく細かな粒状の土のかたまりが、軟らかく集まったような状態のものをいう。土にそのような団粒構造をつくることのできるのは、一握りの土のなかに億単位で生息している微生物だけ。生産者たちが畑に堆肥をいれて「土づくりをする」というのは、この植物にとって有効な微生物たちの活動を活発にするためにほかならない。

「微生物農法」の追求

渋谷さんたちは失敗を糧にして、土を大切にする農法への道を進んできた。その経過のなかで「島本微生物農法」という有機農法に出会い、農業基本法以来、農林水産省がおし進めてきた「近代農法」とはちがう、独自の農法を追求しつづけてきた。

「私たちはあえて「有機」という言葉は使わずに、微生物農法といって二〇年やってきました。それは、農作物を育てるうえで何よりも大事なものは、土中の微生物を活発にすることだと考えてきたからです。農薬をできるだけ使わずにすむ農作物。そのために堆肥が必要な

のは、微生物の働きを活発にするためなんですよ」

島本微生物農法は、農民の直観的な土づくりから科学的な理論を与えてくれたもの。この農法との出会いがなければ、産直センターもこれほど発展していなかっただろうと、渋沢さんと山口さんは口をそろえる。

ハウス研究会で土づくりが大切と気づき、みんなで堆肥をつくるようになったとき、手づくり堆肥の独特なおいが地域では評判になってしまった。いまなら「公害」として騒がれるところだが、問題にもならなかったのは、「農業とはそういうものだ」とだれもがわかっていたからなのだろう。

土を大切にして効果をあげている渋沢さんたちの農業を、新聞は「臭い農業」としてとりあげた。ところが、安全でよい農作物のできるこの臭い農業が消費者から注目をあびて、やがて現在の産直へとつながっていくことになる。

4 消費者との出会いから

生活の基本をすえた生協のとの出会い

一九七三年の秋のこと。現在、深谷市を本拠地に行っている埼玉北部市民生協の新井千明専務理事が、一人の男性を渋沢さんたちの仲間のところにつれてきた。その男の人は、現在は

さいたまコープとなっている埼玉中央市民生協商品部の職員。年末年始用の深谷ネギなどを、組合員に供給してくれないかという申し入れだった。全国各地で生協がつくられていったころで、生協としても組合員に提供する農作物をあちこちで探していた時期だったのだ。

「話し合っていると、価格はそっちでいいと思う価格をいってくれという。いままで百姓っていうのは、自分でつくったものに自分で値段をつけた経験がなかったんですよ。これにはびっくりしましたね」

お互いの思いが合致して、五人の生産者が供給を始めた。二年すると、その職員が大宮西支部に転勤になった。しばらくして、組合員を十数人つれて産地見学にやってきた。ちょうどその直前に、「臭い農法」が新聞にのったのだった。

公害や食品添加物が、ようやく問題になりだしたころだった。生協組合員の安全、安心な食への要求は、強くなっていた。

このとき渋沢さんは、まだ露地でキュウリなどを栽培していた山口功さんの畑に組合員を案内する。生協の組合員はこの時期ハウス栽培を否定していたので、渋沢さんたちの施設では理解されないと考えたからだだった。山口さんは渋沢さんたちとは別の出荷組合をつくり、露地栽培の野菜を出荷するかたわら、総評の労働組合員などに年末の野菜を産直供給していた。

「うちの畑にくるとね、キュウリがピカピカ光ってるんで、油ぬったのか」っていうんで

うよ。＼そうじゃない、こういう肥料を使ってるからつやがでるんだ。っていったら、素晴らしいっていいね、その場ですぐ何本でもいいからわけてくれていいのには、ほんと、こっちも驚いたね」

その何年かまえ、三八歳で農協の理事になっていた渋谷さんが、NHKラジオの座談会に招かれて発言したことがあった。テーマは、「化粧野菜は是か非か」。すでにそのころから、市場出荷される野菜が栄養価やおいしさといった本質的な部分よりも、外見で判断される弊害がマスコミでも注目され始めていたのだった。出荷組合をつくって地元を生産者を組織しても、市場出荷をしている限り流通にあった生産を強要されていくことに、渋谷さんや山口さんたちも気づいていた。

キュウリは切り株ごと、どんなかつこうのものでもいい。ホウレンソウも畑からとったまま、束ねなくてもいい。山口さんを驚かせた生協組合員たちの言葉は、後に市場出荷の矛盾に気づいた若い農業後継者を産直センターにひきつけた、産直の基本的な意義のひとつだったのだ。

「この大宮西支部の人たちがきて初めて、私たちは生活を基本にすえた生協っていうもの意味を教えられたんですよ」

畑からとった作物を洗ったり束ねたりしないでいいのなら、かなりの手間がはぶける。その分を生産にまわして規模拡大することができるから、出荷価格は安く抑えられる。生産者

と消費者の利益が一致して、産直のルートが確立した。

そうはいつても、ここからすんなりと、いまの産直センターにつながってきたわけではなかった。

いままでの市場出荷とはちがったメリットがある。大宮西支部の組合員との産直が始まると、意気込んだ生産者が何人か集まってきた。いずれも、大規模な専業農家ばかり。ところが、供給側に比べて消費者側は組合員の自主活動で、両者のバランスは極端に悪かった。

「生協のほうから要求される量なら、八人の生産者では週に一、二回だせば終わってしまう。こんなんじゃないやっても意味ないって、何人かがまた農協へもどっていった。それでも、組合員さんの安全な農産物への要求は、もう押し止めることはできなかつたんですね。生協の専務なんかは、体制が整うまで一年まってくれっていったんですよ。だけど組合員の声が強くって、結局、生協としての産直を見切り発車ですすめるしかなかつたんですね」

組合員の自主活動から、生協としての産直へ。規模が大きくなって、再び生産者たちもどってきた。

5 安全な野菜を一人でも多くの人に

生協産直の選択

生協産直が正式に開始されてからも、道はけっして平坦なものではなかった。

生協としての産直が開始されると、懸念したとおりすぐにシステムの破綻が起きた。野菜の扱いに慣れていない職員が、葉物野菜を他の品物と同じように常温の倉庫にいれ、何日もしてから配送してしまったのだ。組合員の手元に届いた野菜は、当然、食べられるようなものではなくなっていた。

「産直の野菜って、こんなものなの。なら購入なんかしないわ」

離れていこうとする組合員に、生協職員も生産者も全力をあげて働きかけ、結ばれかけた産直のきずなを必死になって守ろうとした。組合員ばかりでなく、職員の産地見学もこのころから急にふえていったと、渋沢さんは記憶している。

任意のグループでは限界があると、埼玉産直センターが農事組合法人になったのは八二年。紆余曲折がありながら、生協との産直は全国に広がってきた。

生協の一支部の自主活動で始まった産直を生協全体の活動にしていくとき、渋沢さんたちが「支部をとるか生協をとるか」と問われたことがあった。自主活動とはいえ、渋沢さんた

ちの野菜を共同購入する組合員はすでに三〇〇〇人をこえていた。産みの苦しみをへて産直のルートを開発した組合員たちからは、生協が取り上げるのなら組合員をやめるという声もあがっていた。それまでの規模の産直を継続するなら、自主活動のままていくほうがスムーズに進むだろう。

「でもわれわれは、そこで生協のほうをとったわけです。なぜなら、われわれは最初からこの地域全体の生産者を組織して、地域農業を未来にまで残していくことを考えていた。そのためには、消費者の規模も大きくなっていくことが必要だったわけです。実際、生協産直になってからは、全国各地の生協を紹介してもらうことで、これだけの生産者を組織していくことができたんだと思っています」

いまから二〇年ほどまえ、小さなきっかけから始まった深谷の地での産直活動。安全、安心な食べ物づくり。市場流通のゆがみへの問いかけ。土づくりを大切にして、栄養のある農作物をいつまでもつくりつづけられる農法。当初は生産者や消費者がそれぞれがばらばらに考えていたことが、産直を通じてひとつに集約されていった。それはまさに、時代の求めていたものにあつた活動だったからといえるのかもしれない。

「あの畑に消費者の方がきて、キュウリをくれといったときには、こんな活動にひろがるなんて夢にも思っていないませんでしたよ。時代の要求が、われわれの団体をつくったっていいんじゃないんでしょうか」

渋沢さんも山口さんも、口をそろえてそう語る。

時代の流れに合致して、埼玉産直センターはここまで規模を大きくしてきた。しかし、その時代の流れが方向を少しずつ変えてきていることにも、渋沢さんたちは気がついている。九四年の流行語のひとつにもなった「価格破壊」は、いまでは生協の事業運営にも大きな影響をあたえるようになってきた。消費者が農産物にまで「低価格」を要求してきたとき、国内には輸入農産物に価格で抵抗できる生産者はいないだろうと山口さんはいう。

「ほんとうにそういう農産物でいいのか、生協が発足した当時に求められていた、安心、安全はどこへいったのか。われわれとすれば、やはり疑問は残ります。できれば生協さんにももっともっと、組合員さんへの問いかけや、情報提供を強めてほしい思いはあります。そうはいつでも、生協っていうものは不特定多数の人の組織ですから、かわってきたからといって、注文をつけてすませているだけではすまないと私たちも思います。やはりこれからは、生協の組合員さんが注文書をみて自然に注文してしまうような生産物。つまり味がよく品質のよい、差別化できる農産物をつくっていかなくてはいけないと思います」

産直で農産物出荷をやってこれたから、精神的な安らぎも、経営面での安定も生まれた。市場出荷につきものの、夜なべ仕事での選果からも解放された。将来に展望がもてるから、時間と労力がかかっても土づくりを力を入れる農家がふえてきた。自分たちの選んだ道が間違っていないかったことは、若い組合員がふえてきたことに現われていると、山口さんはいう。

後継者の生きられる農業を

渋沢さんは以前から、日本の農政は「農業安楽死政策」だといって、農林水産省のやることを批判してきた。

「いま、農民の平均年齢は還暦である六〇歳をこえているといわれてるんですよ。農業は、本来だったら一人前になるのに最低一〇年。Uターンで農業についた人なら二〇年しかかかんです。ということは、若い後継者のいなくなった日本には、もはや優秀な農民はいなくなるという意味ですよ」

高齢になった農民が、元氣なかがり農業をつづけること自体に問題があるわけではない。何歳になっても分担をできる作業があることも、他産業とちがう農業の特徴であり、すぐれている点だともいえる。しかしそれは、若い世代や中核となる世代もいるなかでの話。だれもあとを継ぐ者がなく、高齢者しか従事しなくなったときの農業がどうなるかは、すでに全国各地の農村の姿がその実例を示している。

山口さんは、こう語る。

「単純に言えば、大根だとかカボチャだとか、重いものをつくる生産者が年々へってきてるでしょ。年をとった人ばかりだから、同じつくるならできるだけ軽くて楽なものをつくりたいと思うわけです。それに、後継者を失った農民は、将来に展望もないから土づくりなどしないでしょう。農業と化学肥料で土を枯らしてしまします。経験豊かな人たちだから、

それがよくないことなど百も承知してるんですよ。だけど、土づくりの効果がでてくるのは何年か先のことでしょ。もうこのあとはだれも、この畑で農業をすることはしない。そう考えたら、だれだってそうなってしまおうと思えますよ」

将来を考えたら、微生物農法で土づくりをしていかなければならない。そのノウハウを徹底して確立した埼玉産直センターの農業は、未来への希望にあふれた農業といえる。

その産直センターが、二五〇人という組合員で地域をリードする存在になってきている。しかも集まっているのは、三〇代を中心とした若い世代ばかり。新しい時代の流れのなかで、これからの産直はさまざまな波をこえていかなければならないだろう。それでも、土づくりをどこまでも基本にすえていく限り、埼玉北部の地に農業の展望は失われることはないのではないだろうか。